



泳ぎあり、スラブありの室谷川第4弾

会越国境 室谷川駒形沢

佐貫

【日時】 2007年6月2日(土)～3日(日)

【メンバー】 佐貫(L)、大野、棚橋、高柳、小川

室谷川探訪を一昨年(2005年)の7月に始めてから、流域の遡行は今回で4度目になる。駒形沢は以前から気になっていた上、昨年倉谷沢を遡行して出た稜線から見る源頭のスラブ帯がとても印象的だったので、今年は是非とも虫が増える前に行ってみたいと思っていた。マイナーな場所なのでどうせいつもの3人だろうと大して熱心に募集もせずいたら、ジロト沢で味を占めた(?)高柳さんがエントリー。しかも小川君からも参加希望のメールまで来た。5人になってしまうので一瞬迷ったが、「若者への布教は最優先課題である!!」との声が強く、ザイル使用となったら工夫して効率よく行こうということで5人パーティーを成立させた。

塩沢や六日町に比べると津川は遠い。2時半過ぎにやっと到着し、仮眠を取ってやや遅めの7時起床。室谷集落の先からは「山菜採り禁止」「入山禁止」の看板がこれでもかというくらいに出てくる。おまけに一人1000円の入山料を集める人まで道端に立っており、「こんなに警戒するなんて、一体何が採れるんだろう?」と期待しながら大久蔵沢出合付近の駐車場所まで車で入る。室谷川の左岸から右岸に移る先からはどうやら舗装工事でもしているようだ。帰りの時間を聞かれ、日曜なら通れるよと関係者の方に言われた。巨大堰堤の横で準備をしながら、小川君に「どうしてこんなマイナーな沢のわけのわかんない計画に乗ろうと思ったの?」と訊くと、「なかなか行けないところだから」。ふむふむ、若いのにそのヘソ曲がり精神は素晴らしい!

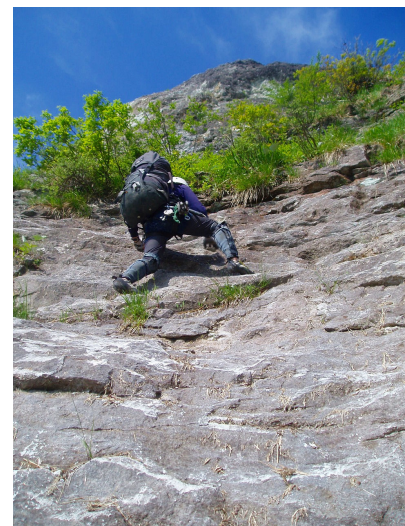
入渓地点から少しのゴーロ歩きを経て微妙なへつりのゴルジュを通り、大釜を持つ5m滝へ。水量は少ないようだ。前に来た時にはこの滝の登りでは右岸を巻いたが、先頭を歩く大野さんは釜に沿って落ち口へと斜めに登っていき、するすると通過してしまった。さすが、ワイシャツ姿で人工壁を登る姿が目撃されているだけのことはあり、最近クライミングも藪と同じくらい得意になったようである。そろそろ遊んでくれなくなってしまいそうだ…。後続も同ルートを採った。泳ぎを2箇所ほど交えながら駒形沢の出合へ到着し、ここで釣り竿持参の棚橋・小川両名は川虫を探して先行することにした。駒形沢は地形図からも見てとれる通り出合から平瀬が続き、なかなか見つからない川虫を求めて石をひっくり返しながらの遡行となる。間もなくきれいな裾広がりの10m滝が現れてちょっと驚いたが、これは快適に登れた。倉谷沢と比較するとだいぶ小粒な印象の沢ではある。

地形図の「駒形沢」の「形」の字あたりから、側面に雪が出てくるようになる。し

<http://www.tomanokaze.dojin.com/>

かし雪はあれども山菜は皆無で、オバケウルイとウドの大木がある程度だ。やがて側壁が灌木に覆われた尾根からスラブに変わるとともに沢にも雪が詰まってきて、最初の大きな雪渓はくぐる羽目になった。その先も嫌らしい雪渓は続く。途中に大きな亀裂があり、少し戻ってラントクルフトから雪渓の下に降り、暗い中を潜って進むと、すぐ先には巨岩のトンネルがあったりしてちょっと緊張する。巨岩と雪渓が重なって周囲は真っ暗、何ともいえない緊張感。駒形山登頂後は同沢下降の予定だったが、ここはもう通りたくないなあという顔を皆していた。少し進んで雪渓がかろうじて切れているところで、幸運なことに左岸にぽっかりとテント一張り分の高台があり、ここを幕場とした。盛大な焚き火とウルイ、ミズ料理を楽しんだが、夜は20m上の雪渓からの冷気が流れ込んできて寒かった。

日曜は「恐らく稜線を藪漕ぎで下山になるだろう」ということから、早出して雪渓を歩き出す。冷気さえ浴びなければ相当気温が高くて暑いということがすぐに判明した。標高600mくらいから急激に立ち上がってきて高度を稼ぎ、前方に灌木の目立つスラブが広がる。わらじの記録で「桃尻スラブ」と命名された場所と思しき白っぽい岩の基部でフラットソールに履き替えた。前週同様、ブヨがまたまた群がってきてうるさい。フリクションが効いて気持ちいいなーと思いながら3,40m登るとそのスラブは終わってしまい、その先はなんとただの沢登りのような景色が続いていた。「もうちょっとスッキリしたスラブが続いてると思ったんだけど・・・」というボヤキが聞こえる。仕方なくまた沢靴に履き替えてしばし沢登りだ。途中で登りづらい小滝を一箇所越え、左隣の沢に踏みかえると、そこから稜線まではずっと快適そうなスラブが広がっていた。左側はややツルっとしてフラットソールで登りたいような感じ、右側は沢靴でもグイグイ登れそうな階段状の目の粗いスラブ。二手に別れ、大野ー棚橋ー小川が左ルート、高柳ー佐貫が右ルートをそれぞれ登る。登攀自体は簡単だが開けていて高度感があり、足を滑らせたなら取付まで落ちていってしまいそうなので注意が必要だ。最後は藪漕ぎ30秒で駒形山の山頂にドンピシャリ。「ああ～また来てしまった！」こんな地味なピークに5人ものパーティーで来ることが出来て夢のようだ…と思ったら、そこには映彩ランタン会の赤布が残されていた。きっと人数では負けているだろう。暑い中、高柳さんの切り分けてくれたグレープフルーツがおいしかった。



周囲の稜線には雪がないのに、なぜか守門だけはスキーが出来そうなくらいの雪に覆われているのが印象的であった。

下りは駒形沢の右岸尾根をc. 792まで藪を漕いで下り、そこから沢に戻ることにした。藪とはいっても背の低い灌木で、頂稜には踏み跡なのか獣道なのかうっすらと藪が薄くなっているところがある。1級の藪漕ぎで稜線上を進み、途中から灌木の尾根を下っていくと途中で右手に沢が現れた。この沢は下降向きの何もない沢で、あっさり駒形沢の最初に雪渓を見た場所に降り立つことができた。あとは昨日のルートに戻るだけ。行き同様にそこら中にうろちょろしている蛇に怯えながら本流に戻り、ゴ一口歩きと泳ぎを繰り返すうちに大釜の5m滝に着いた。ここは飛び込みで下りることに決めていたのだが、いざ落ち口に立つと足がすくむ・・・しかしここはリーダー責任ということで、私が先頭で飛び込む羽目になった。一人飛び込んでしまえば安心なのか、次々にドボン！ドボン！と続く。出発前の予報よりも天気が良くて気持ちいい！あとは一投足で車に着いた。

【行程】 6/2 大久蔵沢手前駐車地点 (9:00) ~ 駒形沢出合 (10:50/11:25) ~ 幕場 (14:50)

6/3 出発(4:40) ~ スラブ帯 (5:40) ~ 駒形山 (8:10) ~ 駒形沢出合 (11:55) ~ 駐車地点 (14:30)

【地形図】 駒形山

